原子力ルネッサンス

新日本製鐵株式会社　相談役名誉会長　今井（いまい）　敬（たかし）

昭和4年12月生まれ。昭和27年東京大学法学部卒業。同年富士製鐵(株)入社。昭和45年新日本製鐵(株)の発足に伴い同社本社燃料金属部副部長。代表取締役副社長、代表取締役社長、代表取締役会長等を経て、平成15年6月より相談役名誉会長。

最近、囲碁人口が激減している。会社の囲碁部はとうとう無くなり、OB囲碁会のみが盛んだ。団塊の世代の人たちは、一体何を趣味として生活してきたのであろう。私は日本棋院総裁として、今は青少年の囲碁熱に望みを託している。何故こんな書き出しかというと、私にバトンを渡して下さった中原恒雄氏は、六十年近く前の東大囲碁部のキャプテンであり、私はその末席を汚していたからだ。

閑話休題、今回は原子力の話をしたい。

原子爆弾が広島に落ちた時、私は帝国海軍最後の兵学校生徒で、山口県防府にいた。敗戦間もなく帰京する際、広島を通り、その悲惨な状況に息をのんだ。

その罪滅ぼしか、六十年前にアメリカ大統領のアイクが、「アトムズ・フォー・ピース」を唱えた。当時、新進気鋭の中曽根康弘代議士はアメリカでこれを聞き、日本にも原子力の平和利用を、と運動して、日本の原子力平和利用三法が出来た。一九五五年のことである。これには、軽水炉は勿論、核燃料サイクル、フュージョンまで展望されており、その他の放射能の平和利用までもが唱えられていた。

それから、五十年経った。現在、我が国の軽水炉は五十五基、一次エネルギーの十数%を担う。また、究極のエネルギーである高速増殖炉も、もんじゅの事故で十年間中断したが、近いうちに再稼動することになっている。気の長い話だが、四十年後には商業炉が動いている筈だ。

それまでは、使用済み燃料を再処理して出来たプルトニウムをウランと混ぜ、MOX燃料として使用する話が進んでいる。今、十七、八基がMOX燃料を使えるところまで来つつある。

こうした中で、経産省は今般、原子力立国計画を発表した。誠に時宜を得ている。

原子力は、再生産可能な究極のエネルギーである。また、CO_2の発生は殆ど無い。隣国である中国は、経済発展のためにエネルギーを濫消費し、石油やガスを世界中から買い漁っている。また、石炭を二十億トン燃やし、大量のCO_2を発生させている。こうしたことから、エネルギーの安全保障と、地球環境のためにも、原子力の利用拡大は不可欠である。

また、アメリカ・イギリス・スウェーデンなど、世界的にも原子力発電見直しの気運が盛り上がっている。「原子力ルネッサンス」と言われる所以だ。

しかし、原子力発電と、核兵器開発は隣り合わせだ。北朝鮮やイラン問題など、人類の将来に心配な要素もある。

日本は、核兵器を持たない国の中で、唯一、核廃棄物の処理が認められている。疑いを除くためにも、出てきたプルトニウムは直ちにMOX燃料にしなければならない。こうした平和利用には、国際的な大人の合意と、国内にあっては原発立地地域の協力が不可欠だ。

その協力を得るためには、原子力産業に携わる者は、絶対事故を起こさない覚悟を持つ必要がある。そして国内的に、国民の信頼感を取り戻さねばならない。また、平和利用の先進国としての模範を世界に示さなければならない。

五十年振りに、装いを新たにした原産協は、こうしたことのために重要な役割を担っている。私はその会長として、今後、積極的に行動していくつもりである。

次号は、伊藤忠商事（株）相談役、室伏稔氏にお願いします。

㊋

小長啓一 氏→野々内隆 氏 → 根來泰周 氏→石弘光 氏→武藤敏郎 氏→高橋温 氏→増田寛也 氏→ 西澤潤一 氏→内田盛也 氏→中原恒雄 氏→今井　敬 氏